

**古滝明音議長**

次に日程第2、「一般質問」を議題といたします。

議長に「発言通告書」が提出されておりますので、順次発言を許します。

最初に、H⁴部会 2番 国本中学校2年 半田宗一郎さん、4番 旭中学校2年 長谷川暁さん、14番 宇都宮短期大学附属中学校1年 石崎朝子さん、16番 宇都宮短期大学附属高等学校2年 鈴木諒子さん。

2番 半田宗一郎議員

議長，2番

4番 長谷川暁議員

議長，4番

14番 石崎朝子議員

議長，14番

16番 鈴木諒子議員

議長，16番

〔2番 半田宗一郎議員，4番 長谷川暁議員，14番 石崎朝子議員，16番 鈴木諒子議員 登壇〕

2番 半田宗一郎議員，14番 石崎朝子議員

2番，国本中学校の半田宗一郎です。

14番，宇都宮短期大学附属中学校の石崎朝子です。

「思いやり手帳事業」について提案いたします。

私たちは，誰もが住みよいまちにしていくためには，どうしたら良いのかということ調べていくうちに，街中で見かけるたくさんの障害に気がきました。例えば，点字ブロックの上にあるたくさんの自転車や，階段，バスの段差などです。

これらは，体に不自由のない私たちにとっては普段あまり気にすることのないものです。しかし，目が不自由な方は，自転車が点字ブロックの上にあると進路がわからなくなったり，車椅子を使っている方にとっては，小さな段差でも，行動の範囲を制限させられる原因になります。

そこで，障がい者の方のために，市はどのような取り組みをしているのか調べてみました。すると，「宇都宮市やさしさをはぐくむ福祉のまちづくり推進計画」に基づき，意識啓発として「こころのユニバーサルデザイン運動」や，共に支えあう地域社会づくりなどのソフト面の推進，また，公共施設のバリアフリー，公共交通手段のバリアフリーなどのハード面の推進を行い，高齢者の方や障がい者の方をはじめとするすべての市民が個人として尊重され，安心して自立した生活をおくることのできるような政策を行っていることがわかりました。

しかし，さらに住みよいまちにしていくためには，バリアフリーの施設の充実だけでなく，一人ひとりが自分から行動し，自分と違った立場の人のことを理解しようとする，こころのバリアフリーの充実が必要です。

そこから私たちは，生活の中で自然と障がい者や高齢者の方に手を差し伸べられる，あたたかい宮っ子を育てるためにはどうしたらいいかと考えました。そこで「思いやり手帳事業」の提案をします。思いやり手帳とは，障がい者や高齢者の方に対するこころのバリアフリーを進めるために，ボランティアに参加するごとにポイントがたまり，一定のポイントに達したときには市長から表彰が受けられたり，広報紙に名前が載ったりするものです。こうすることで，ボランティアへの参加意欲を高め，ボランティアに参加する機会を増やすことができます。また，「思いやり手帳」を市内の小・中学校に配布したり，市役所窓口で配布するなどして，この活動を広めることで，小さいころから障がい者や高齢者の方に対する思いやりの心が育てられ，宇都宮は思いやりに溢れるやさしいまちになっていくでしょう。

以上で提案を終わります。よろしく申し上げます。

4番 長谷川暁議員，16番 鈴木諒子議員

4番，旭中学校の長谷川暁です。

16番，宇都宮短期大学附属高等学校の鈴木諒子です。

私たちは，「救急車の有料化」を提案します。

本市の救急車出場件数及び搬送人員の推移を見てみると、平成元年頃から、救急車の出場件数と搬送人数の差が大きくなってきました。平成20年には、救急車の年間出場件数が17,060件に対して、年間搬送人数が14,976人と約2,000人も差が見られます。これは、その2,000人の人たちの中には、軽い怪我や病気にも関わらず、救急車を呼んでいる人や、タクシーのような感覚で呼んでいる人がいることを示しています。

また市内には、救急隊13隊・救急車17台しかなく、さきほどの年間出場件数の17,060件を時間に換算すると31分に1回、1日あたり約47回出場していることになり、このままでは、緊急性があり、本当に救急車を必要とする人への適切な救命処置などが遅れ、救える命が救えなくなりま

す。

そこで私たちは、これらのことを改善するために「救急車の有料化」について提案いたします。

救急車を有料化することにより、不用意に救急車を呼ぶことがなくなり、救急車の適正利用に対する意識を高めることができ、救急車の出場件数が減ることで、本当に救急車を必要とする人への適切な救命活動につながると考えます。

みなさんはどう思いましたか。これらのようにして、安心して暮らせるよりよい宇都宮市にしましょう。

これで提案を終わりにします。ご検討をよろしくお願いします。

佐藤栄一宇都宮市長

議長，市長

古滝明音議長

市長

〔佐藤栄一宇都宮市長 登壇〕

佐藤栄一宇都宮市長

本市の福祉のまちづくりや「こころのユニバーサルデザイン運動」について大変よく勉強され、宇都宮を思いやりにあふれるやさしいまちにしたいという、半田議員、石崎議員の御質問にととても感心いたしました。

それでは、御質問にお答えいたします。

本市では平成8年に、福祉都市宣言を行い、その中で「赤ちゃんからお年寄りハンディキャップを持った人々などすべての市民が笑顔でことばを交わし健康でいきいきと暮らせる心のふれあう福祉のまちをつくりま

す」と宣言しているところであります。

この宣言を踏まえ、「宇都宮市やさしさをはぐくむ福祉のまちづくり条例」や「推進計画」を策定し、「推進計画」には、「福祉のこころをはぐくむ人づくり」のひとつとしてボランティア活動への参加や支援を盛り込み、多くの市民がボランティア活動等にできる限り参加できるように取り組んでいるところであります。

議員御提案の「思いやり手帳事業」は、特に、宮っこのみなさんがボランティア活動に参加するきっかけづくりとして、さらには参加意欲を高めるうえで大変すばらしいものであると考えており

ます。

したがいまして、本市が小中学生向けに作成しております日記形式の「スタンダードダイアリー」などにボランティア活動の実績を記録できるように工夫するとともに、その実績に応じて表彰する仕組みなどについて検討し、宮っこのみなさんがボランティア活動に積極的に参加できるよう取り組んでまいります。

次に、長谷川議員、鈴木議員の「救急車の有料化について」であります。増加傾向にある救急需要の対策について深く考え、具体的な取り組みの御提案をいただき、ありがとうございました。

それでは、御質問にお答えいたします。

救急出場件数は、高齢化、核家族化の進行や住民意識の変化などを背景に、全国的に増加傾向であり、本市におきましても、平成11年からの10年間で4千707件増加し、約1.4倍の1万7千60件となっております。搬送した方の中には、軽症者も含まれております。

議員御指摘のとおり、緊急性のあるけが人や急病人に対する迅速・的確な対応に支障を来たすことがあってはならないと考えております。

このことから、増加対策として、「救急車の適正利用」について、市民の皆様へ、御理解をいただくため、市の広報紙やホームページに掲載するほか、リーフレットを全世帯へ配布するとともに、様々なイベントや救急に関する講習会など、あらゆる機会を利用して広報活動を行ってきたところであります。

平成19年に最多であった出場件数は、平成20年には、1,104件減少したことから、市民の皆様のご理解が得られ、広報の効果が表れてきたものと受けとめております。

議員ご提案の救急車の有料化につきましては、救急需要の増加を抑える効果が期待されますことから、今後、十分に検討を進める必要があると考えております。

しかし、有料であることにより、本当に救急車が必要なとき、利用をためらってしまうことや、タクシーの代わりに利用されるおそれなどもありますことから、当面は、「救急車の適正利用」のさらなる普及に取り組んでまいります。

今後とも、市民の皆様が安心して暮らせるよう努力してまいりますので、皆さんも、御協力をお願いいたします。

古滝明音議長

以上で、H⁴部会の質問を終わります。